

松江市文化財調査報告書58集



二名留遺跡発掘調査報告書

1995年3月

松江市教育委員会

(財)松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書59集

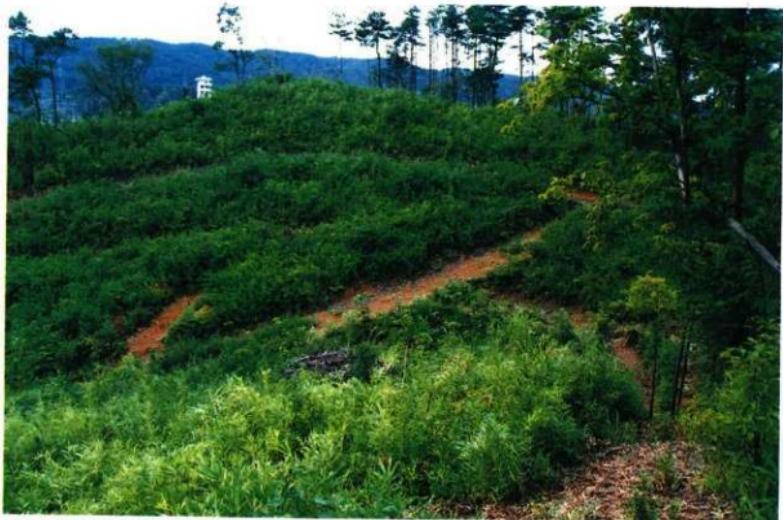


二名留遺跡発掘調査報告書

1995年3月

松江市教育委員会

(財)松江市教育文化振興事業団



調査区域



T-4 土壌セクション



出 土 剔 片



出 土 陶 器 (布志名燒)

例　　言

1. 本書は、平成6年度において実施した宍道湖ニュータウン造成追加工事にかかる二名留遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、有限会社松雲土木から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は下記の通りである。

依頼者 有限会社 松雲土木
代表取締役 信高 由子
主 体 者 松江市教育委員会
事務局 教育長 謙訪 秀富
生涯学習部長 中西 宏次
文化課長 中林 傑
文化財係長 岡崎雄二郎
実施者 松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課
理 事 長 大塚 雄史
事務局長 佐藤千代光
調査係長 中尾 秀信
調査担当者 清古 諒子
調査員 遠藤 正樹
作業員 細田 正義・坂本 憲市・坂本貴美子・松並 清
細田千代子・細田ミヨノ・池田 英子・松浦 律子
舟木八千代・細田千代子・隅岡 高吉・隅岡 花子

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
調査指導 勝部 衛氏（玉湯町教育委員会主事）
丹羽野 裕氏（島根県埋蔵文化財調査センター調査第2係主事）
片岡 時子氏（玉湯町教育委員会主任主事）
福間 瑛士氏（湯町窯）
調査協力 雲山 探俊氏（有限会社松雲建設興業）、信高 貴仁氏（同）
高井 幹男氏（同）
5. 拓本は、荻野 哲二（松江市教育委員会嘱託員）の協力を得た。
6. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆・編集は、遠藤が行った。

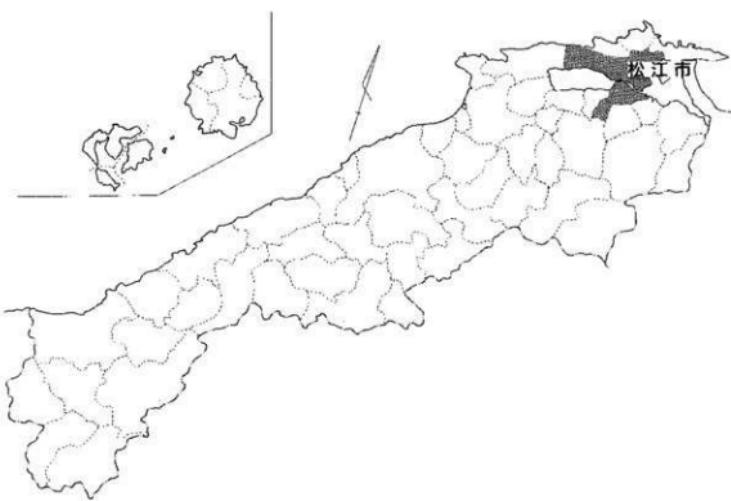
文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱、すなわち斗と拱の組み合せによって全体で幹を支える腕木の役をなす植物のイメージを表わし、これを三つに重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくというものです。



文化財愛護
シンボルマーク



第1図 島根県地図



第2図 松江市地図

本文目次

第1章. 調査に至る経緯.....	5
第2章. 位置と周辺の歴史的環境.....	5
第3章. 調査の概要.....	13
1. 調査区の設定.....	13
2. 調査の経過.....	13
3. 調査の結果.....	15
(a) T - 1	15
(b) T - 2	15
(c) T - 3 及び T - 3 拡張区.....	16
(d) T - 4 及び T - 4 拡張区.....	18
(e) T - 5	22
(f) T - 6	22
(g) T - 7	23
(h) T - 8	24
第4章. 遺物の検討.....	25
1. 剥片.....	25
2. 上師器片.....	26
3. 須恵器片.....	26
4. 土師質土器片.....	27
5. 陶器片.....	27
(a) 脇部 南氏の見解.....	28
(b) 福間 球士氏の見解.....	28
第5章. 小結.....	32

卷頭図版目次

- 卷頭図版 1. 調査区域、T - 4 土壌セクション
卷頭図版 2. 出土剥片、出土陶器（布志名焼）

挿 図 目 次

第1図. 島根県地図.....	2
第2図. 松江市地図.....	2
第3図. 周辺の遺跡.....	7
第4図. 二名留遺跡トレーニング設定図.....	13
第5図. T-1 東壁セクション.....	15
第6図. T-2 東壁セクション.....	16
第7図. T-3 北壁セクション.....	16
第8図. T-3 西壁セクション.....	17
第9図. T-4 北壁セクション.....	19～20
第10図. T-4 西壁セクション.....	21
第11図. T-4 東壁セクション.....	21
第12図. T-4 土壌平面図.....	21
第13図. T-5 西壁セクション.....	22
第14図. T-6 西壁セクション.....	23
第15図. T-7 西壁上部セクション.....	23
第16図. T-7 西壁下部セクション.....	24
第17図. T-8 西壁セクション.....	25
第18図. 二名留遺跡出土遺物.....	30～31

図 版 目 次

図版1. T-1 完掘状況、T-2 完掘状況、T-3 拡張区完掘状況.....	33
図版2. T-4 完掘状況、T-4 検出黒褐色層、T-4 土壌検出状況.....	34
図版3. T-4 土壌検出状況、T-4 上層完掘状況、T-4 下層完掘状況.....	35
図版4. T-5 完掘状況、T-6 完掘状況、T-7 完掘状況、T-8 完掘状況.....	36
図版5. 試掘調査出土土師器、試掘調査出土須恵器、本調査出土土師質土器.....	37

第1章 調査に至る経緯

平成5年度、有限会社松雲土木は松江市乃木福富町字二名留地内において「宍道湖ニュータウン造成工事」を計画され、平成5年7月23日付でその予定地内の埋蔵文化財の分布調査依頼書が松江市教育委員会教育長宛に提出されたので、同年7月27日に分布調査を実施した。

その結果、計画区域の北側部分で土器を表探したことからその区域の試掘調査が必要であることを事業者宛に回答した。

その後の本市教育委員会と事業者との協議の結果、試掘調査を8月中旬に実施することになり、開発予定区域の北側の谷部分の緩斜面（試掘T-1）、計画道路部分の緩斜面（試掘T-2）、南側の緩斜面（試掘T-3）に10m×2mの試掘用トレッソをそれぞれ設定し、8月11日から18日の間、計5日間を費やして試掘調査を実施した。

その結果、試掘T-2・3（開発予定区域南側）では遺構・遺物とともに確認されず、遺跡は存在しないと考えられ、本調査の必要はないとの判断した。

しかし、試掘T-1では土師器・須恵器が出土すると共に人為的な掘り込み面が認められ、遺跡が存在すると思われた。そのため開発予定区域北側部分の全面発掘調査が必要となったものである。

第2章 位置と周辺の歴史的環境

二名留遺跡は松江市乃木福富町735-15に所在する。現地は尾根を挟んで玉湯町と隣接する地域であり、遺跡は本地域の谷状の山林に立地する。周囲は狭い谷を隔てて南北に走る丘陵に挟まれており、平野を望むことはできないが、丘陵の頂上から眼下に宍道湖を見渡せる景勝の地である。

乃木地区周辺の遺跡については不明な点が多いが、知られている範囲内で紹介する。

（1）二名留古墳群

乃木福富町に所在する古墳時代中期後葉から後期中葉にかけて築造された古墳群で、方墳2基、円墳1基からなる。この3基全てから来寺石製の箱式石棺が検出され、しかも全て頭位を南に置いていることから、同一系統の豪族によって築造されたものと考えられる。また周辺地域で、玉

湯川、忌部川両流域で花仙山産出の碧玉、めのうを使った玉作りが盛んに行われていたことや、本群中 2 号墳の石棺内に玉髓質めのうが納められていたことなどから、本古墳群の被葬者は玉作りに深くかかわった人物で、本地域において権力を持つ人物であったと考えられる（1）。

（2）大角山遺跡

乃木福富町に所在する古墳時代中期の集落跡で、丘陵谷間の緩斜面に立地する竪穴式住居跡 5 棟で構成される。この集落は、住居跡相互の切り合い関係がなく、また出土した古墳時代中期の土師器にもほとんど形式差がないことから、短期間のうちに営まれ、廃絶されたと考えられている。

本遺跡の竪穴式住居跡は、碧玉製勾玉・管玉未製品、めのう製勾玉未製品、及び内磨砥石などを有し、玉生産を行っていたと考えられるものと、玉作に関連する遺物を持たないものに大別することができ、小集落における玉生産のあり方を知る上で貴重な史料といえる（2）。

（3）大角山古墳群

乃木福富町に所在する古墳群で、前方後円墳、円墳、方墳の 7 基よりなる。この中でも大角山 1 号墳は全長 61.7m と大規模なものである。後円部は 2 段に築かれ、ほぼ中央には石を使った埋葬施設があるようである。また北側の裾からは円筒埴輪の破片が採集されていることや、前方部が八の字に開き、よく発達した形であることなどから、この古墳は 5 世紀後半から 6 世紀前半頃に築かれたものと考えられる。

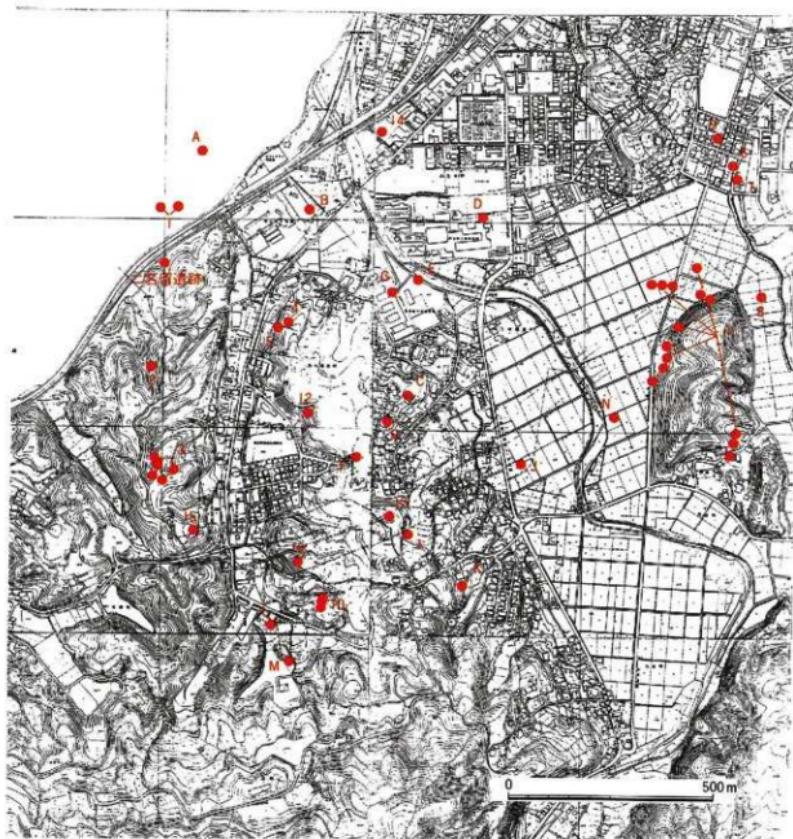
付近には古代の玉作遺跡が多いことから、この古墳に眠る豪族も玉生産に深く関与していた可能性が高いといえよう（3）。

（4）廻田遺跡

乃木福富町に所在する弥生時代後期の竪穴式住居跡 1 棟と溝状遺構 1 つが検出された。竪穴式住居跡には住居を拡張し直した形跡が見られる。

住居跡の内部施設では、柱穴以外に使用されたと考えられる土壙が検出されているが、これは「特殊ピット」と呼ばれているものと考えられる。しかしこの「特殊ピット」については未だ不明な点が多く、今後の報告に期待する面も多いのが実情である。

また溝状遺構については、その性格を特定することができず、この遺構の住居跡との関連性についても不明である（4）。



第3図 周辺の遺跡

1.二名留古墳群 2.大角山遺跡 3.大角山古墳群 4.廻田遺跡 5.廻田古墳

6.友田遺跡 7.南友田遺跡 8.後友田遺跡 9.向原古墳群 10.弥陀原横穴群

11.田和山古墳群 12.森木谷古墳 13.松本修法壇跡 14.欠田遺跡

15.すべりざこ横穴群 16.松本古墳群

17.その他の遺跡

A.福富湖岸遺跡 B.神立遺跡 C.福富I遺跡 D.福富II遺跡

E.蓮花垣遺跡 F.屋形古墳 G.屋形遺跡 H.乃白玉作跡

I.天場古墳 J.乃白遺跡 K.乃白権現遺跡 L.松本横穴群

M.岩屋口古墳 N.薬師前遺跡

(5) 遠田古墳

古墳の西側が削平を受けており、主体部も検出されていない。古墳築造期については、墳頂部であったと考えられる位置から須恵器の坏蓋が1個体出土しているので、この坏蓋から見ると山本編年Ⅱ期に相当する時期に比定できるようである。また周溝が全周せず、途切れてブリッジ状の特徴を呈しており、このブリッジ状の周溝がどのような性格を持つものなのか今後の報告が待たれるところである(5)。

(6) 友田遺跡

浜乃木町に所在する遺跡で、弥生時代中期前半から後期にかけて造られたと考えられる土壙墓26基、弥生時代中期後葉頃の築成と考えられる墳丘墓6基、弥生時代後期後半頃の築成と考えられる四隅突出型方形墓1基よりなる。

この遺跡で最も注意されるべき点は、土壙墓群の存在を全く無視し、その上に四隅突出型方形墓を築成している点であろう。このことは、土壙墓群と方形墓との間に政治的に断絶した関係がある、少なくとも血縁的な関係はなかったのではないかと考えられる。いずれにしても、友田遺跡から検出された墳丘墓、土壙墓、四隅突出型方形墓の三者の間の関係については、今後かなり検討の余地があるようと思われる(6)。

(7) 南友田遺跡

浜乃木町に所在する遺跡である。すぐ北側の丘陵上に友田遺跡が所在するため、混乱を避けるために友田遺跡の南部の遺跡という意味で「南友田遺跡」と命名された。

本遺跡は、尾根上平坦面を後世削平された形跡があり、住居跡などの明確な遺構は検出されなかった。しかし、南北両側の斜面付近からは、弥生前期後半頃の土器と方形の土壙、石鎚、石包丁、そして古墳時代終末期頃の須恵器類が多量に出土し、住居跡が存在していた可能性は多分にある。ただ本遺跡からの出土品を見ると、弥生中期、後期といった土器は皆無であり、中期以後は生活の拠点を別の地域に移したのであろう(7)。

(8) 後友田古墳

乃白町に所在し、友田遺跡の南方約1kmの地点にある。古墳の西側は既に半分以上が崩壊しており、また墳頂部も四等水準点設置の際、墳頂部が削平された様子で、墳頂部東端に高さ30cmほどの土壙状の盛り上がりが残されていた以外は全て平坦であった。

本古墳が既に本来の姿をとどめていない以上、古墳の築成当時の主体部の形状や供獻された土

器の位置、数量等を推定することはできない。しかし、本古墳の築成年代については出土遺物から、山本編年Ⅰ形式と同時代か、もしくはそれより若干古くなるものと推定される。

県下では珍しい須恵器碗が出土している（8）。

（9）向原古墳群

上乃木町に所在する古墳群で、南には友田遺跡、さらに南には南友田遺跡がある。本遺跡は、方墳2基（1・2号墳）、円墳2基（3・4号墳）、1号墳周溝付近の古墓群となる。

方墳2基からは、そのいずれからも山本編年Ⅰ期に相当する須恵器が出土しており、5世紀後半頃のものと推測される。特に2号墳については、鉄劍・鐵鎌を副葬したものであった。

円墳2基については、古墳に関連する遺物を検出していないので、その築造年代を知ることはできない。しかし近隣の円墳の点在状況からすると、方墳2基との年代差はさほどないのではないかと推測される。

最後に1号墳周溝付近の古墓群であるが、遺構の形状については、他に比較すべき類例がなく、今後検討の必要がある。出土品で宋銭、かわらけ、唐津焼高台付き小皿があるが、宋銭は日本においては年代測定の基準にできないという事情と、かわらけの細かい編年が確立していないという事情から唐津焼高台付き小皿を年代測定の基準として考えると、恐らく古墓群は江戸時代前期頃を中心とした時期に造られたと推察される（9）。

（10）弥陀原横穴群

乃白町に所在する横穴群で、6世紀後半に造られたものようである。

本横穴群は東方の乃白の広い谷間・水田地帯と、西方の乃木福富の狭い谷間・水田地帯との間に位置する山間の谷奥に立地している。「風土記」によると、奈良時代にはこの地域にいわゆる「正西道（まにしのみち）」が通過しており、前代においても重要な交通路に沿った地域であったと推測できる。

従って、このような地域性や農耕の発達を考えると、本横穴群は有力農民の共同墓地であった可能性が強い（10）。

（11）田和山古墳群

乃木福富町・乃白町・浜乃木町の3地域にまたがる標高約50mの独立した小丘陵に所在する古墳群で、前方後円墳1基、前方後方墳1基、方墳8基、円墳2基、乃白社跡1所よりなる。

特に古墳時代後期（6世紀後半）に構築されたと考えられる田和山1号墳は、石室の構造や規模などから古墳時代後期に通有の古墳であるといえるが、この時期の出雲では、田和山1号墳の

ような前方後円墳の築造は非常に少なくなり、横穴墓が主流となっていることを考えると、このようにあえて時代の潮流に逆らい、なお前方後円墳を築造したという事実は、この古墳がかなりの経済力と政治力を持つ支配勢力によって造られたものではないかとの想像をかき立てるのである。

このように考えると、田和山1号墳は、古代の乃木地区の地域性と経済状態を知る上で貴重な古墳であるといえる（11）。

（12）森木谷古墳

乃木福富町に所在し、円墳1基と考えられる。未調査のため今後の報告が待たれるところである。

（13）松本修法壙跡

乃白町に所在し、方墳状の土壇と五輪塔よりなる。これより北側の約25mの地点に松本古墳（方形墳）があり、調査当初まではこの遺跡も方形墳と考えられていた。しかし調査の結果、古墳とは認め難く、壇状遺構としての性格が強く認められ、かつ五輪塔の存在が確認されるにおよび一種の宗教関係遺跡とも考えられる。また土壇と五輪塔が直接関係しているという確証もない。

五輪塔はその形式から中世末から近世初頭のものとみられるが、土壇については、今のところ年代を確定するに充分な史料はないのが現状である（12）。

（14）欠田遺跡

乃木福富町に所在する遺跡である。

本遺跡は忌部川下流の自然堤防上にあり、石包丁をはじめ弥生時代前期から占墳時代前期の壺や甕が出土している。

従ってこのような事実からすると、遺跡周辺では、この頃には水田を作り、農業生産力を基盤として、安定した生活を営み始めていたことが知られ、村の長は経済的、政治的に権力を確大していったものと推察される（13）。

（15）すべりざこ横穴群

乃白町に所在する横穴群で、2基以上の横穴が考えられる。未調査のため今後の報告に期待するものである（14）。

(16) 松本古墳群

乃木福富町に所在する古墳群で、標高37m前後の底丘陵南側斜面に2基の横穴墓が検出された。調査の結果、1号横穴墓からは須恵器蓋環（山本編年Ⅲ期）・短頸壺が、2号横穴墓からは須恵器蓋環（山本編年Ⅲ期）・高环・提瓶・土師高环・鉄鎌・刀子が出土した。従って、出土遺物から2号横穴墓が1号横穴墓より古い時期に築造されたものと推察される（15）。

(17) その他の遺跡（表1）

	名 称	所 在 地	種 别	概 要
A	福富湖岸遺跡	乃木福富町	散布地	有舌尖頭器
B	神立遺跡	乃木福富町	散布地	弥生土器片
C	福富Ⅰ遺跡	乃木福富町	散布地	石斧
D	福富Ⅱ遺跡	乃木福富町	散布地	石斧
E	蓮花垣遺跡	乃木福富町	散布地	石臼、叩き石
F	屋形古墳	乃木福富町	古墳群	方墳1基以上
G	屋形遺跡	乃木福富町	散布地	砥石、石斧、須恵器
H	乃白飞作跡	乃白町	玉作跡	砥石
I	天場古墳	乃木福富町	古墳群	方墳1基以上
J	乃白遺跡	乃白町	散布地	石斧
K	乃白権現遺跡	乃白町	玉作跡	めのう片、上師器、須恵器
L	松本横穴群	乃白町	横穴群	約10穴
M	岩屋口古墳	乃白町	古 墳	横穴式石室
N	薬師前遺跡	乃白町	散布地	弥生土器、土師器、須恵器

参考文献

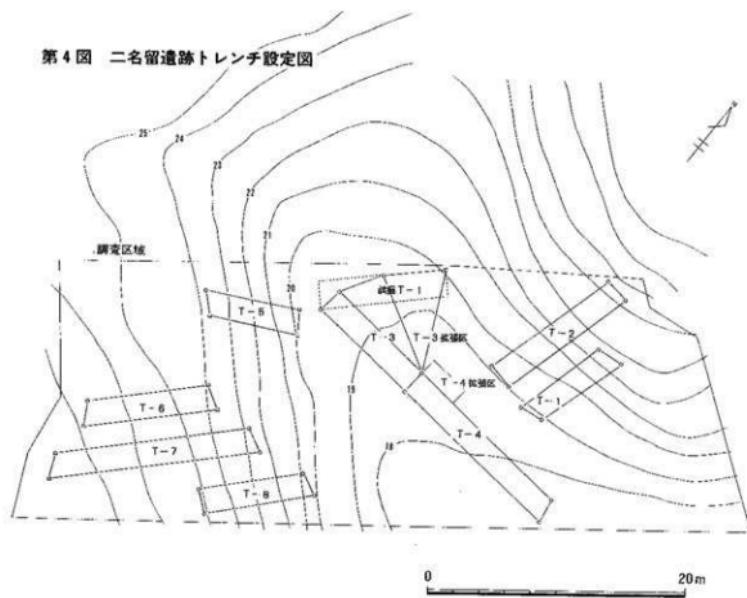
- (1) 松江市教育委員会『二名留古墳群発掘調査報告書』1992年
- (2) 島根県教育委員会『島根県消防学校建設に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』1988年
- (3) 乃木郷土誌編集委員会『乃木郷土誌』1991年
- (4) 松江市教育委員会『廻田遺跡 廻田古墳』1988年
- (5) 松江市教育委員会『廻田遺跡 廻田古墳』1988年
- (6) 松江市教育委員会『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (7) 松江市教育委員会『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (8) 松江市教育委員会『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (9) 松江市教育委員会『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (10) 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集』1971年
- (11) 松江市教育委員会『田和山古墳群発掘調査概報』1991年
- (12) 松江市教育委員会『二名留古墳群発掘調査報告書』1992年
- (13) 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集』1991年
- (14) 松江市教育委員会『二名留古墳群発掘調査報告書』1992年
- (15) 松江市教育委員会『二名留古墳群発掘調査報告書』1992年
- (16) 島根県教育委員会『島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター年報Ⅱ』1993年
- (17) 松江市教育委員会『二名留古墳群発掘調査報告書』1992年

第3章 調査の概要

1. 調査区の設定

二名留遺跡は松江市と玉湯町の境を宍道湖岸に向かって南にのびる丘陵の南端上に位置する。現地は標高17~28mの南東方向に落ち込む谷状の山林である。調査は、試掘の結果から調査区北部を中心とした谷上に遺構の存在が考えられたので、谷上にトレンチを設定し検出状況に応じて拡張することとした。また、遺構存在の可能性は低いと考えられたが、調査区内における試掘トレンチがやや少ないと感じられたので、念のため谷の両斜面にもトレンチを設定した。

第4図 二名留遺跡トレンチ設定図



2. 調査の経過

平成5年7月23日 有限会社松雲土木が、開発予定地内埋蔵文化財の分布調査を松江市教育委

- 員会に依頼する。
- 7月27日 松江市教育委員会が、開発予定地内の分布調査を実施し、北側の谷部分で土器を表探。試掘調査が必要となる。
- 8月11日 開発予定地内の試掘調査を実施した結果、北側の谷部分の緩斜面に設定したトレンチから土師器を検出。
- 8月18日 同トレンチを含む谷部分の緩斜面について、全面調査が必要となる。
- 平成6年9月26日 本調査トレンチ設定
- 10月3日 現場初日、T-1・2の荒堀を始める。遺物なし。
- 10月6日 T-1・2完掘。遺物なし。T-3・4・5の荒堀を始める。
- 10月7日 T-4より須恵器、土師器、陶器（布志名焼）を検出。本調査初の遺物検出に一同歓喜。
- 10月12日 強風で危険な状態になったため現場を早く切り上げる。T-5完掘。
- 10月13日 T-3より須恵器、陶器（布志名焼）を検出。T-3拡張。
- 10月14日 T-6の荒堀を始める。T-4完掘。
- 10月18日 T-3より陶器（布志名焼）2片を検出。T-8の荒堀を始める。T-3、T-3拡張区からピット状の黒褐色溜まりを検出。遺構検出の期待高まる。
- 10月19日 T-3より陶器（布志名焼）1片。T-3、T-3拡張区から多数のピット群を検出。しかしピットの状態から、同ピット群は遺構でないことがわかり、意気消沈。
- 10月24日 完掘したT-4壁面に不自然な層位（穴状）が見られることを、松江市文化課文化財係主事昌子寛光氏に指摘される。
- 10月26日 T-7荒堀を始める。
- 11月1日 T-4壁面に沿ってサブトレンチを入れた結果、壁面の不自然な層位は、岩盤まで人為的に掘り下がった土壤であるという結論に至る。T-3拡張区にサブトレンチを入れる。
- 11月2日 T-4検出土壙の反対側のサブトレンチから黒褐色溜まりを検出。検出位置が谷の底であり、遺物もないことから、太古の堆積物による可能性が高い。T-3拡張区を掘り下げる。
- 11月7日 T-3にサブトレンチを入れ、黒褐色溜まりを検出。土質から遺構である可能性は低いと考えられたが、念のため調査を行うことにした。
- 11月14日 現地指導会。松江市文化課文化財係長岡崎雄二郎氏より貴重な意見をいただく。
- 11月24日 T-3、T-3拡張区精査。精査の結果、T-3黒褐色溜まりからの遺物検出はなく、黒褐色溜まりは自然堆積によるものと判断。T-4検出土壙については、1層ずつ土を取り払うことによって遺構の性格を確認すること

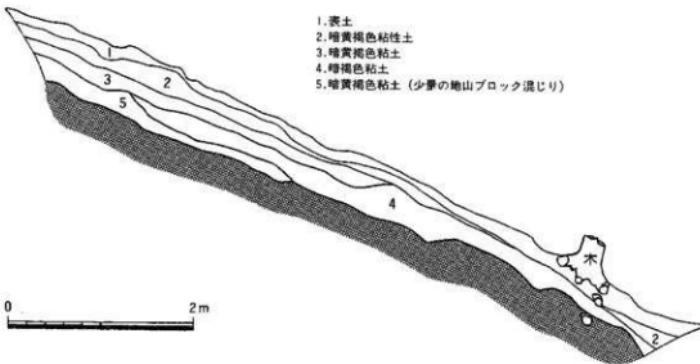
とに重点をおいた。しかし遺物を検出することはできず、土壌の性格を明確にすることはできなかった。

3. 調査の結果

(a) T - 1

幅約2m、長さ約7.5mのトレンチである。深さ40~80cmで地山面に至り、表土の下は、暗黄褐色粘性土、暗黄褐色粘土、暗褐色粘土、暗黄褐色粘土（少量の地山ブロック混じり）の4層よりなる。遺構、遺物とも全く見られなかった。

第5図 T-1 東壁セクション

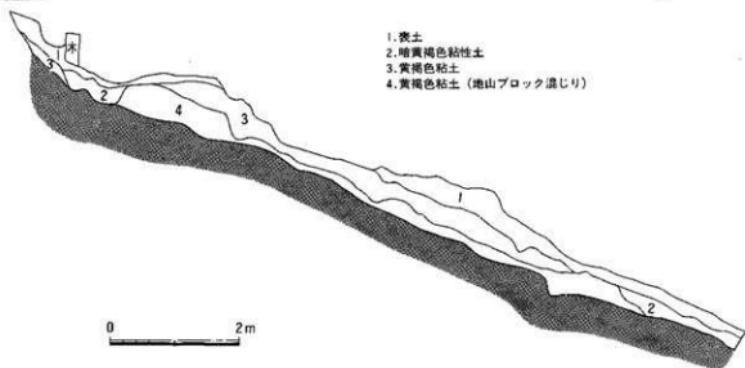


(b) T - 2

幅約2m、長さ約11mのトレンチである。深さ30~100cmで地山面に至り、表土の下は、暗黄褐色粘性土、黄褐色粘土、黄褐色粘土（地山ブロック混じり）の3層よりなる。遺構、遺物とも全く見られなかった。

第6図 T-2 東壁セクション

L=21.5m

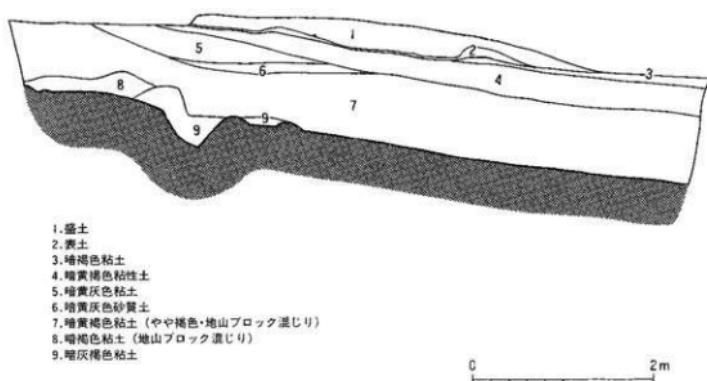


(c) T-3 及びT-3 拡張区

幅2m、長さ9mのトレンチで、試掘T-1との重複部分を持たせてトレンチを設定した。後にトレンチ東側杭から時計回りに $23^{\circ} 39' 40''$ 、距離8m08cmの杭まで拡張した(T-3)。そして調査状況を見てさらに西側杭から反時計回りに $56^{\circ} 29' 00''$ 、距離8m40cmの杭まで拡張した(T-3拡張区)。これらはおおよそ深さ100~130cmで地山面に至る。

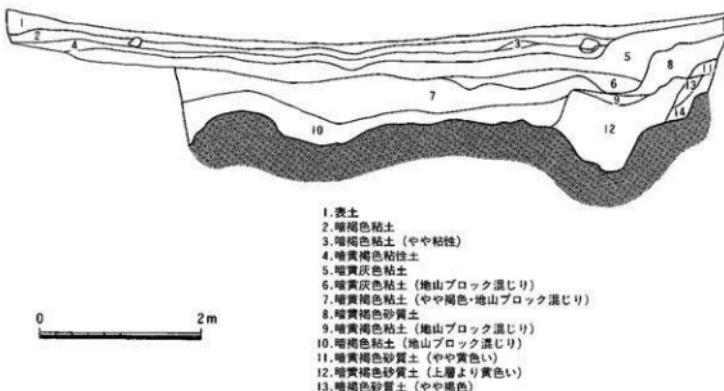
第7図 T-3 北壁セクション

L=19.35m



第8図 T-3 西壁セクション

L=20.00m



T-3からは遺物を検出することができた。表2はT-3出土遺物の層位関係を示したものである。遺物検出面は表土から第3層までで、第4層以下からの遺物の検出はなかった。表2を見ると、18世紀から現代に至るまで存在している布志名焼が須恵器の下層もしくは同層から出土している。T-3には擾乱層が見られず、掘り返した形跡も全くないことから、本トレチの出土遺物は他区域からの流れ込みである可能性が極めて高いと言わねばならない。

T-3出土遺物（表2）

No	種別	器種	層位	備考
2	剝片		第3層	玉髓質
9	須恵器	甕	表土	
10	須恵器	甕	第2層	
11	須恵器	甕	第3層	
16	土師質土器	不明	第3層上面	
19	陶器	火鉢？	表土	布志名焼
20	陶器	火鉢？	第3層	布志名焼
21	陶器	碗？	第3層	布志名焼
22	陶器	碗？	第3層下面	布志名焼

また試掘T-1出土遺物は次の通りである。

試掘T-1出土遺物（表3）

No	種別	器種	層位	備考
1	剝片		表土	
3	土師器	壺	第3層	
4	須恵器	甕	耕土中	
5	須恵器	甕	表土	
6	須恵器	甕	表土	
7	須恵器	不明	出土地不明	
8	須恵器	不明	出土地不明	

(d) T-4及びT-4拡張区

T-4はT-3に隣接する幅約2m、長さ約14mのトレンチで、深さ80~160cmで地山面に至る。本トレンチからは、少量の遺物の他、北側壁面より土壤を検出した。そのため急速土壤の性格を明確にするための拡張区を設定した。

T-4拡張区は、T-4北側壁面の土壤全体の推定区域に設定した調査区である。本調査区検出の土壤には、規格性は見られなかった。しかしT-4北側壁面検出当初から、土壤下部の岩盤に掘り下げた形跡が見られ、本土壤が人為的に掘られたものである可能性が高いことから調査に至ったものである。本土壤の調査では、まず土壤のプランを検出し、そして土壤内の土を1層ずつ取り扱うことによって、土壤の性格を明確にすることに重点をおいた。

調査の結果、本土壤からの遺物の検出ではなく、土壤内の土質も有機物堆積の結果形成されるものとは明らかに違うものであった。県内にこのような土壤の検出例が少なく、現段階においては本土壤の性格を明確にするまで

には至っていない。今後の報告に期待する次第である。

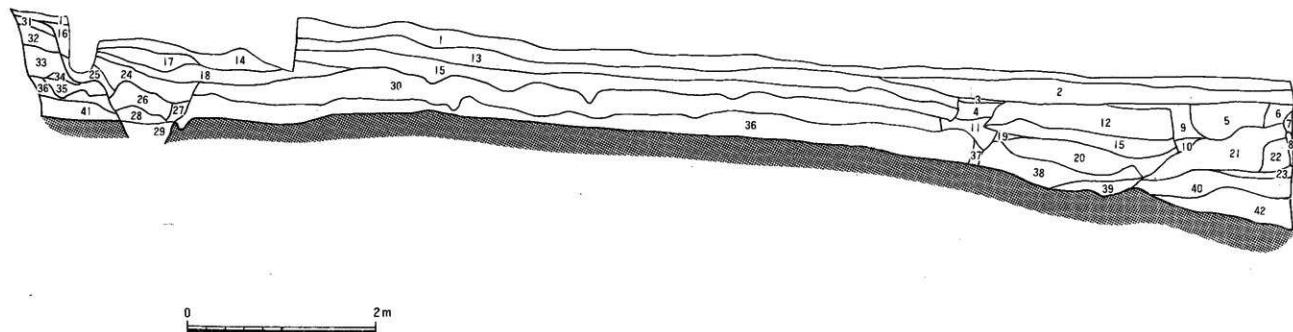
またT-4及びT-4拡張区出土遺物は、表4の通りである。表4を見ると、本調査区においてはほぼ時代順の遺物堆積をしているが、本調査区における出土遺物は、T-3に隣接する区域に多く、表2の結果と切り離せない関係にあると思われる。

T-4出土遺物（表4）

No	種別	器種	層位	備考
12	須恵器	壺	表土下面	山本Ⅲ期?
13	須恵器	壺	第3層	山本Ⅲ期?
14	須恵器	壺	第3層	
17	土師質土器	壺?	表土	
18	上師質土器	摺鉢	出土地不明	
23	陶器	碗?	攪乱土中	布志名焼
24	陶器	甕	表土	布志名焼

第9図 T-4 北壁セクション

- L = 15.00m
- | | | |
|---------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1.表土 | 14.暗黄灰色風化土 | 36.暗灰褐色粘土 |
| 2.暗黄褐色粘土（やや褐色） | 15.暗黃灰色粘土 | 37.黒褐色粘土 |
| 3.暗褐色擾乱粘土 | 16.暗黒灰褐色粘性土 | 38.暗褐色粘土（地山ブロック混じり） |
| 4.淡褐色粘土 | 17.暗黃灰色粘土（やや褐色） | 39.灰褐色粘土 |
| 5.暗黄灰色粘土 | 18.黄灰色砂質土 | 40.淡褐色粘性土（多量の地山ブロック混じり） |
| 6.暗褐色粘土 | 19.暗黃褐色粘土 | 41.黄褐色粘土 |
| 7.暗黄褐色粘土（地山ブロック混じり） | 20.暗褐色粘土（やや褐色） | 42.黄褐色粘土（少量の地山ブロック混じり） |
| 8.暗黄灰色粘土（地山ブロック） | 21.暗黃褐色粘土（地山ブロック混じり） | |
| 9.灰褐色砂質土 | 22.暗黃褐色粘土（少量の地山ブロック混じり） | |
| 10.暗黄褐色擾乱粘性土 | 23.暗褐色粘性土（地山ブロック混じり） | |
| 11.黄褐色粘土（やや褐色） | 24.黄灰色粘土 | |
| 12.黄褐色擾乱粘土 | 25.濃黃黄褐色粘性土 | |
| 13.暗茶褐色砂質土 | 26.濃黃褐色粘性土（地山ブロック混じり） | |
| | 27.濃黃褐色粘性土（やや褐色） | |
| | 28.濃黃褐色粘性土（少量の地山ブロック混じり） | |
| | 29.暗黃褐色粘土（やや褐色） | |
| | 30.黄灰褐色粘土 | |
| | 31.黑黃灰色粘性土 | |
| | 32.暗黑黃灰色粘土（やや褐色） | |
| | 33.黑黃色粘性土 | |
| | 34.黄灰色粘性土 | |
| | 35.暗黃色粘土 | |

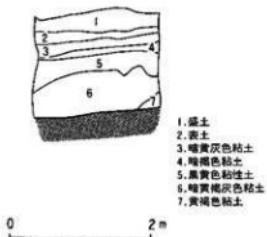


従って表2の結果も充分に考慮する必要があり、その結果も考慮して見ると、やはり須恵器と陶器（布志名焼）は時代順に堆積していると言えない。

とすると、T-4 捣乱層から出土した陶器（表4・No.23）以外の遺物は、通常の堆積過程によって形成された土層から出土しているのであるから、本調査区出土の遺物も他区域からの流れ込みであると考えざるを得ない。

第10図 T-4 西壁セクション

L=15.00m



第11図 T-4 東壁セクション

L=18.00m

1. 淡土
2. 黄褐色砂質土
3. 喀斯特褐色粘土（木による擾乱）
4. 粘土
5. 喀斯特褐色粘土（やや褐色）
6. 喀斯特褐色粘土
7. 喀斯特褐色粘土（地山ブロック混じり）
8. 黄褐色粘土
9. 黄褐色粘土
10. 喀斯特褐色粘土（褐色）
11. 喀斯特褐色粘土（かなり褐色）
12. 喀斯特灰褐色粘土
13. 黄褐色粘土（多量の地山ブロック混じり）
14. 喀斯特褐色粘土（地山ブロック混じり）
15. 喀斯特褐色粘土
16. 淡褐色粘土（多量の地山ブロック混じり）
17. 黄褐色粘土（少額の地山ブロック混じり）

0

2m

0

1m

第12図 T-4 土壌平面図

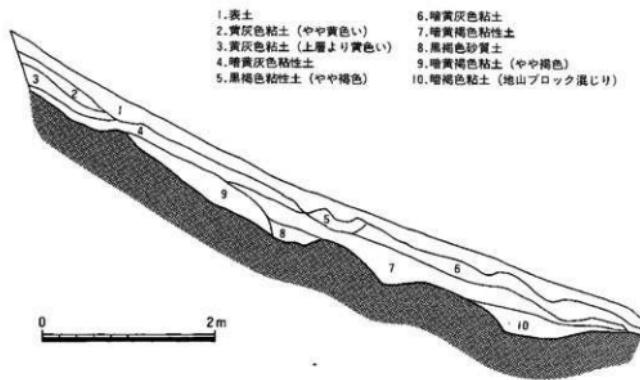
(e) T - 5

幅約2m、長さ約7mのトレンチである。深さ40~80cmで地山面に至り、表土の下は、おおよそ暗黄灰色粘性土、暗黄褐色粘性土、暗黄褐色粘土、暗黄褐色粘土（上層よりやや褐色）、暗褐色粘土（地山ブロック混じり）の5層よりなる。トレンチ中腹に黒褐色の不自然な層位が見られるが（第13図 5. 黒褐色粘性土（やや褐色））、遺物・遺構を検出することはできなかった。同層が表土直下であることなども考えあわせると、自然に形成された有機物堆積層である可能性が高いようである。

T - 5 トレンチ全体からも遺構・遺物の検出はなかった。

第13図 T - 5 西壁セクション

L=24.80m



(f) T - 6

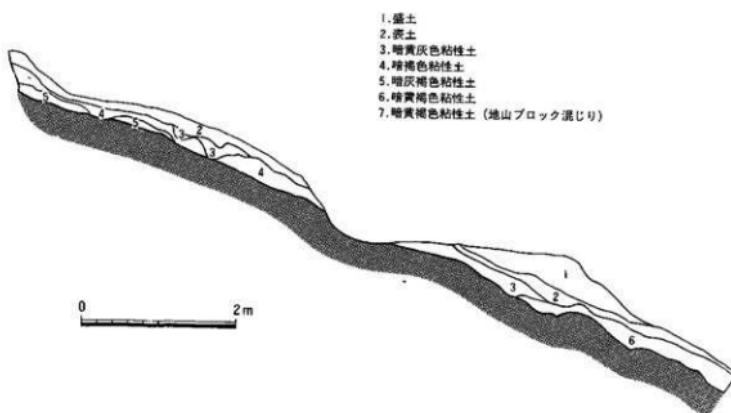
幅約2m、長さ約10mのトレンチである。深さ25~90cmで地山面に至るが、約50cmの盛土が施されている部分があるので、実際の深さは約40cm位までであると考えて問題ないようである。

またトレンチ中腹は重機用道路のため、地山面まで掘り下げられていた。表土の下は、暗黄灰色粘性土、暗褐色粘性土、暗灰褐色粘性土、暗黄褐色粘性土、暗黄褐色粘性土（地山ブロック混じり）の5層よりなる。

遺構、遺物とも全く見られなかった。

第14図 T-6 西壁セクション

L=28.00m

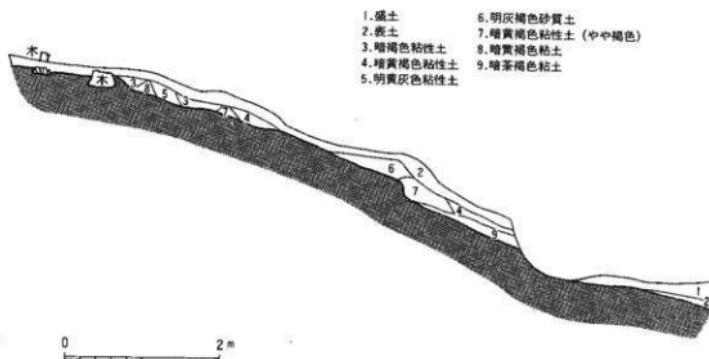


(g) T-7

幅約2m、長さ約16mのトレンチで深さ10~60cmで地山面に至る。表土の下は暗黄灰色粘性土、暗黄灰色粘土、暗黄褐色粘性土、暗黄褐色粘性土(上層よりやや黄色い)の4層よりなる。

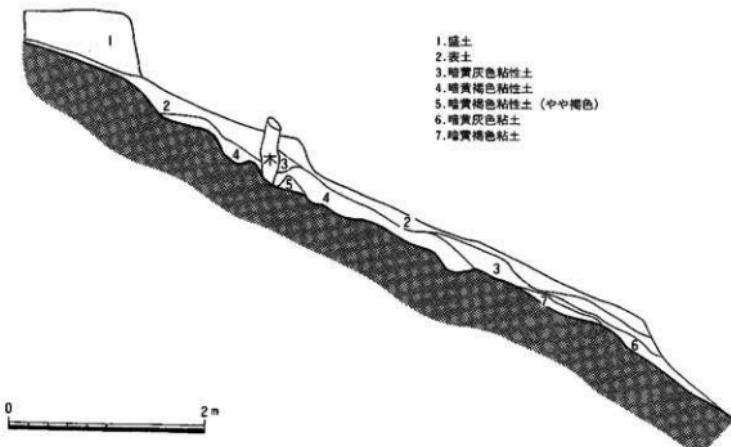
第15図 T-7 西壁上部セクション

L=25.00m



第16図 T-7 西壁下部セクション

L=35.30m



トレンチ中腹は、T-6と同様重機用道路のため地山まで掘り下げられていた。

表土の下は、トレンチ上部は比較的浅く、深さ約30~40cmのところが多い。表土の下が地山であるところも多いようである。

またトレンチ下部はT-6やT-8と対応する部分であり、やはり深さ約30~40cmのところが多い。

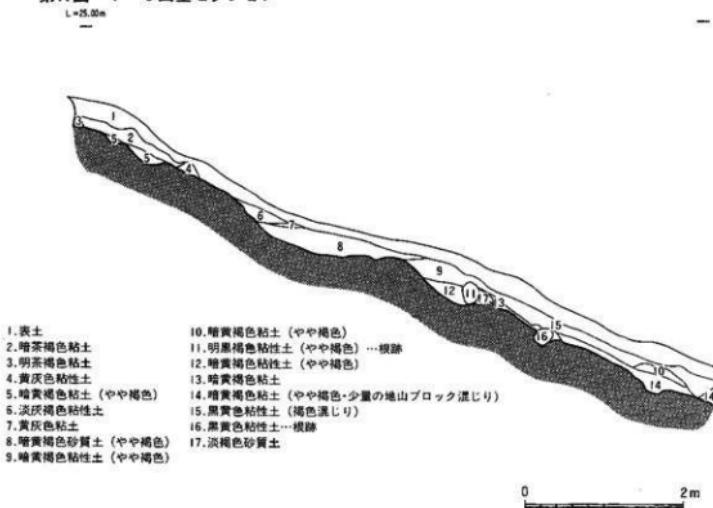
遺構・遺物とも全く見られなかった。

(h) T-8

幅約2m、長さ約8mのトレンチである。深さ20~70cmで地山面に至る。表土の下は、暗茶褐色粘土や淡灰褐色粘性土の下に黄灰色粘性土、暗黄褐色砂質土（やや褐色）、暗黄褐色粘性土、暗黄褐色粘性土（上層よりやや黄色い）、暗黄褐色粘土が見られ、6層または7層よりなっているようである。

遺構・遺物とも全く見られなかった。

第17図 T-8 西壁セクション



第4章 遺物の検討

本遺跡からは、試掘時出土土器を含めて24個体の遺物が出土した。本遺跡にはT-4検出の土壤のように性格不明の遺構が見られるので、遺構の性格を明確にするためにも遺物の詳細な検討が必要不可欠であるように思われる。

従って本章では、本遺跡出土遺物を1個体ずつ検討してみたい。

1. 刻片

(表5)

No.	出土地	層位		備考
1	試掘T-1	表土		
2	T-3	第3層		玉髓質

剥片No.1は試掘時に検出されたもので、薄黄褐色をしており打面が見られる。また剥片No.2はT-3第3層から検出されたもので、玉髓質である。

試掘T-1、T-3の遺物は、遺物の層位関係を見ると、新しい遺物が流れ込んだ後に古い遺物が流れ込んだようである。もしそれが正確しければ、剥片No.2は剥片No.1より新しいということを考えられ、また剥片No.2が玉髓質であることも考えあわせると、本剥片は石器を作る時にできたものというより、玉作時にできたものなのかも知れない。

2. 土師器片

(表6)

No.	出土地	層位	器種	備考
3	試掘T-1	第3層		壺

本調査では検出できなかったが、試掘調査では土師器を検出した。10数個の断片となっており器種を特定し難いが、試掘結果では一括して壺とされているので、ここでは同一個体の土師器壺として扱う。

3. 須恵器片

(表7)

No.	出土地	層位	器種	備考
4	試掘T-1	排土中	甕	
5	試掘T-1	表土	甕	
6	試掘T-1	表土	甕	
7	試掘T-1	出土地不明	不明	
8	試掘T-1	出土地不明	不明	
9	T-3	表土	甕	
10	T-3	第2層	甕	
11	T-3	第3層	甕	
12	T-4	表土下面	坏蓋	山本Ⅳ期?
13	T-4	第3層	坏蓋	山本Ⅲ期?
14	T-4	第3層	壺?	
15	T-4	第3層	不明	

調査の結果、陶器（布志名焼）と同層もしくはそれより上層から須恵器が検出された。現場の状況から見て、陶器も須恵器も流れ込みによるものと考えられるが、本遺跡出土の陶器（布志名焼）は18世紀中葉から作られ始めたものであるため、本調査区への流れ込みはそれ以降ということになる。

須恵器No.4～6、9～11は壺である。須恵器No.4は外面の叩き目が交差していることや内面に自然釉が見られることから壺底部に近い部分と考えられる。

須恵器No.7、8は器種不明のものである。須恵器No.7はあるいは子壺または壺の肩の部分かもしれない。

須恵器No.12、13は环蓋と考えられる。須恵器No.12はヘラ切りの後、ナデ調整を施しており、山本編年第Ⅳ期のものに近いと思われる。また須恵器No.13も环蓋と考えられる。やや摩滅しているが突縁と考えられる稜が見受けられ、形態も山本編年第Ⅲ期のものに近いと考えられる。須恵器No.14は壺底部と考えられる。ただ本遺物については环蓋である可能性も捨て切れない。环蓋であるなら山本編年第Ⅲ期のものに近いと考えられる。

須恵器No.15は小片であるため不明な点が多く、詳細については避けたいと思う。

4. 土師質土器片

(表8)

No	出土地	層位	器種	備考
16	T-3	第3層上面	壺?	
17	T-4	表土	壺?	
18	T-4	出土地不明	摺鉢	

土師質土器No.16～18はいずれも近世のものと考えられる。器種についてはNo.18を除けば不明な点が多いが、強いていえばNo.16は壺の口縁部、No.17は壺の口縁部に近い部分かもしれない。

5. 陶器片

本遺跡からは6片の陶器片を検出した。

出土陶器が全て布志名焼で占められていることや、乃木福富が布志名焼創始者船木與次兵衛村政と深いかかわりを持っている土地である（1）ということを考えると、本遺跡付近も布志名焼流通圏に属していると考えて問題ないようである。

(表9)

No.	出土地	層位	器種	備考
19	T-3	表土	火鉢?	布志名焼
20	T-3	第3層	火鉢?	布志名焼
21	T-3	第3層	碗?	布志名焼
22	T-3	第3層下面	碗?	布志名焼
23	T-4	擾乱土中	碗?	布志名焼
24	T-4	表土	碗	布志名焼

本遺跡出土の陶器については、勝部 衛 氏（玉湯町教育委員会主査）及び福間 球士 氏（湯町窯）の見解を得た。

(a) 勝部 衛 氏の見解

陶器№19～24までの全ての遺物が布志名焼であると考えて間違いないと、器種については以下の通りの見解を得た。

器種についての見解 (I) (表10)

№19	明治・大正期の火鉢の可能性あり、火鉢と考えると本遺物は透かしの部分となるが、透かしにしては大き過ぎるのではないかという問題点もある。
№20	明治・大正期の火鉢である可能性が高い。内側に湾曲した火鉢の透かし部分としか考えられない。
№21～23	ボテボテ茶碗の類か？時代的には24より古いと考えられる。
№24	ボテボテ茶碗の口縁部である可能性が高い。最近のものようである。

(b) 福間 球士 氏の見解

やはり陶器№19～24までの全ての遺物が布志名焼と考えて間違いないと、器種については以下の通りの見解を得た。

なお布志名焼に使われる土は、昔は古志原の土を使っていたが、今は古志原と石見の土を混ぜて作った鉄分の多い土を使っているということである。また釉薬については、銅、藁灰、土灰、長石を混ぜて青呉須を作ったりしているということであった。

器種についての見解（Ⅱ）（表11）

No.19	釉薬の溜まり具合から考えて縁の狭い側が上部になると考えられるが、器種については明言を避けられた。
No.20	釉薬の溜まり具合と透かしの関係から火鉢の透かし部分である可能性はあるとしながらも、口縁部に微妙な反りがあることや、火鉢と考えると取手部分になると思われる透かし部分が尖っており不自然なため、火鉢でない可能性も捨て切れないとの見解を得た。
No.21～23	胎土から見て、現在作っているものより古い。
No.24	ボテボテ茶碗の口縁部である可能性が高い。また釉薬が薄いことから、6片の中で最も高温で焼かれたものと考えられ、最も新しいと考えられる。

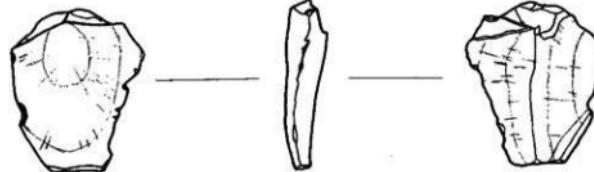
註（1）布志名判官の家臣である船木與次兵衛次村二十三代の孫船木與次兵衛村政（布志名焼創始者）が、布志名焼開窯数年前まで意宇郡福富村（現松江市乃木福富町）において農家に交じり数代天目楽焼に従事していた。

参考文献

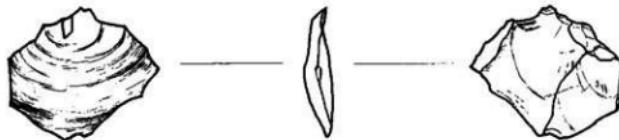
- ・乃木郷土誌編集委員会『乃木郷土誌』1991年
- ・御宝塚新舎 『陶器大辭典』 第5巻 五月書房 1980年
- ふじなやき 布志名焼 （『工藝』三十九號 太田氏記事摘録）

第18図 二名留遺跡出土遺物

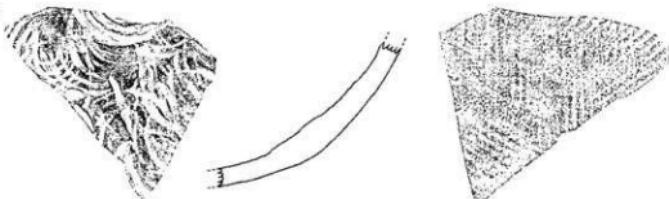
No. 1



No. 2



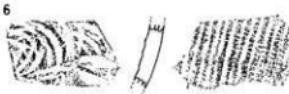
No. 4



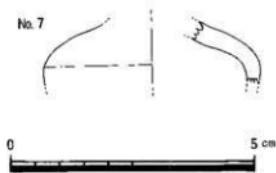
No. 5



No. 6



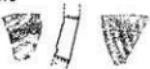
No. 7



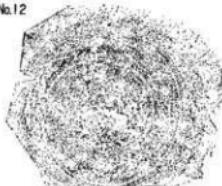
No. 9



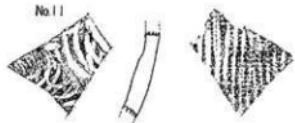
No.10



No.12



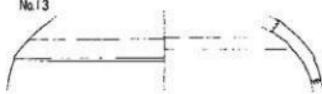
No.11



No.14



No.13

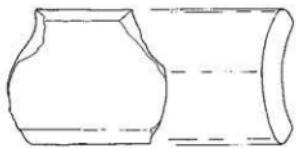


No.16



No.18

No.19



No.20

No.24



第5章 小 結

調査の結果、本遺跡からは少量の遺物と用途不明の土壤が検出されただけであった。土壤の性格については今後の類似報告に期待するしかないが、遺物が検出されたT-3・T-4の層位状の問題を考えると、T-3もT-4も谷沿いに流れ込んだものである可能性が高い。これはT-3・試掘T-1の遺物がT-4より多いことからも裏付けることができる。

従って、谷上部に当たる開発予定区域外隣接地には何らかの造構の存在が考えられる。T-3から玉髓質の剝片が出土していることや、近くに大角山遺跡（玉作跡）があることなどを考えると、あるいは玉作関係の仕事に従事していた人々に關係のある遺跡があるのかもしれない。

また、本調査区出土の陶器は雑器と考えられ、18世紀頃より付近が布志名焼雑器の流通圈に属していたと推定されることから、後世においては本調査区付近でも雑器としての布志名焼が重宝されていのうであろう。

布志名焼は、明治十五・六年頃に出雲陶器業組合を解散した時から、所謂民窯としての輝かしい光彩を失ったと言われているが、それは維新後の豪華なる個人主義と自由経済との風潮が、昔ながらの民芸を遠ざける傾向にあったからである（1）。

当時の日本は、東アジア最大の近代西洋文化受容国であった。もちろん中国が国体を維持し全面的改革を行わなかったことや、朝鮮のように華夷思想保守型の国もあったから多少差し引いて考えねばならないが、結果的には近代西洋文化の受容が日本の多大な発展をもたらしたのである。

漸進的な発展には常に“古きもの”的逐・破壊を伴う。社会が“古きもの”を遠ざける傾向にあるからである。そして遠ざけられた“古きもの”の中には実際に歴史の陰に埋もれてしまったものも少なくない。

このような社会変動の中、布志名焼にも斜陽の兆しが見られるようになる。布志名焼雑器流通圏と推定される本調査区付近も決して例外ではなかったはずである。しかし、現在に至るまで布志名焼の文化が伝えられているという事実は、乃木福富の人々の生活が布志名焼と密接に関連していたということを示していると言えよう。

参考文献

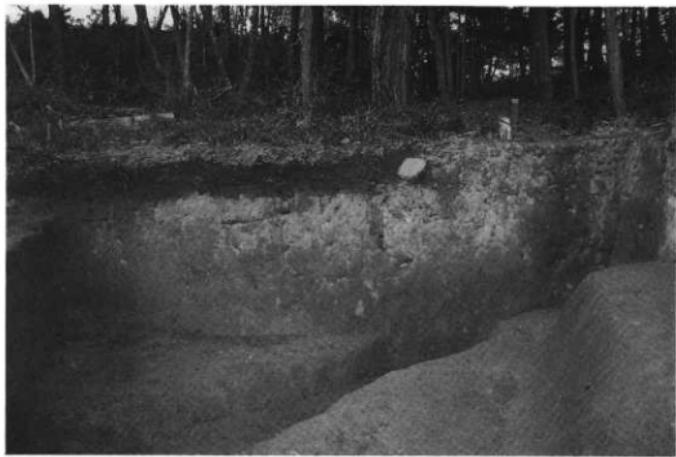
- （1）神宝雲新舎　『陶器大辭典』 第5巻　五月書房 1980年
ふじなやき 布志名焼（『工藝』三十九號 太田氏記事摘要）



T—1 完掘状况



T—2 完掘状况

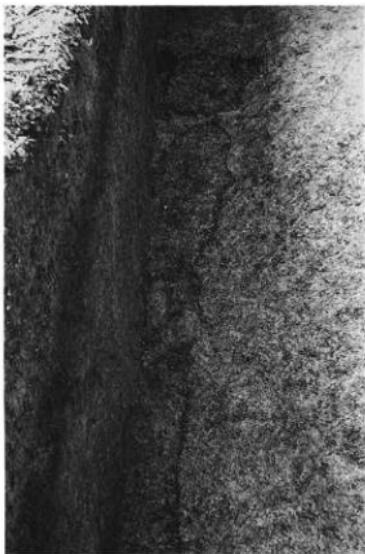


T—3 拓张区完掘状况

圖版 2



T—4 壳掘状况



T—4 検出黑色溜



T—4 土壤検出状況

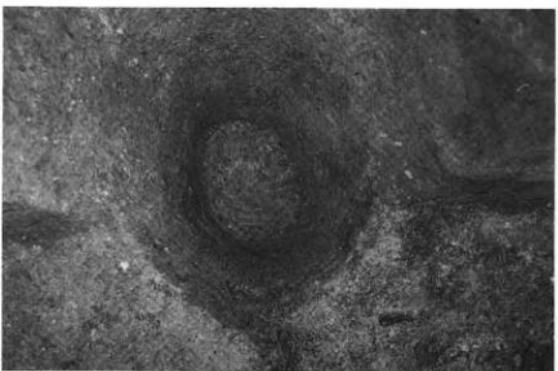
T—4 土壤裸出状况



T—4 土壤完掘状况



T—4 土壤完掘状况



圖版 4



T—5 完掘状况



T—6 完掘状况



T—7 完掘状况

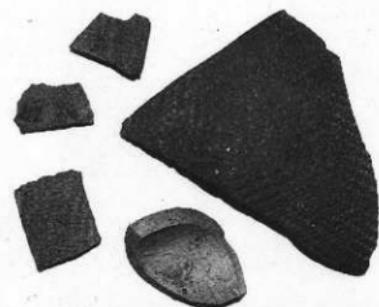


T—8 完掘状况

試掘調查出土土師器



試掘調查出土須惠器



本調查出土土師質土器



二名留遺跡発掘調査報告書

1995年3月

発行 ④松江市教育文化振興事業団
印刷 有限会社 松栄印刷
松江市西川津町667-1